

# 民営都市

トホホベツ

①

一戸幹男

民営都市  
トホホベツ  
第一話

## 1、日本初の珍事

「財政難のトホホベツ市、遂に民間に売却する意思を固めました！何たるザマ！北海道の恥！」

2015年2月、北海道ローカルの超人気番組「なまらでつかいどうワイド 黄昏」の放送中に、こんな速報が入った。

「こんな前代未聞の大事件にもかかわらず、町の声は意外と冷たい。」

「おっ、やっぱりね！」

「なんでもっと早く対処しなかったんでしょね。」

「いっそのこと、無くなってしまう方が良かったんじゃないの？道民として、すごく恥ずかしい・・・。」

「おとうさん、トホホベツ買って！おっきな秘密基地つくるの！」

・・・なぜ、こんなことになってしまったのか。まずはトホホベツの歴史をふりかえりたい。

## 2、栄光とトホホのはじまり

トホホベツ市は「石炭を掘る」、それだけのために作られた町でした。

1902年(明治35年)、富山県臨皆(のぞみな)市出身の無職、皆吉 元常(みなよし)もとつね)が徳川埋蔵金を探しさまよい歩いてるうちに何故かこの地に辿り着き、日本最大の石炭の大露頭を発見しました。

その面積、実に東京ドーム2、7個分と言われています。

世紀の大発見だったにもかかわらず、皆吉は「俺が欲しいのは埋蔵金だべよ！」と言い残し、馬を引き連れモンゴルへ渡り、英雄になったと言われています。

さて、皆吉が露頭を発見したことで、当時主要なエネルギー源だった石炭が大量に採掘できることを確信。国が主導となつて炭鉱と町を建設することになりました。

トホホベツは山間部に位置し、ヒグマが数多く生息しているため先住民も定住した形跡が無く、開拓は困難を極める、と思われました。

が、全国から生活に困つてやつて来た、もう後がない人達が「ピンチはチャンス」を掛け声に、深さ15mの落とし穴を掘り、ヒグマをおびき寄せてはドロップキックで次々とその穴に落とし、そこで飼いはじめました。

中には飛び蹴り職人として頭角を現す者も出たりして事業は順調に進み、犠牲者は40人程度で収まりました。

これがクマ牧場の始まりです。

クマ牧場は最終的にトホホベツ市内に27箇所も作られました。

ヒグマの問題も解決し、いよいよ立派な炭鉱施設が作られ、その周りには住宅がびっしりと並び、村から町へ、町から市へと成長、炭鉱都市が形成されて行きました。

### 3、絶頂の町

1950年代、トホホベツは絶頂期を迎えます。

クマしかいなかったトホホベツは露頭発見から50年後の1952年(昭和27年)には人口17万人にまで膨れ上がっていました。そのほとんどが炭鉱マンとクマ牧場の飼育員です。

町は活気に溢れ、デパート、遊園地、映画館、ボーリング場、コンサートホール、キャバレー、遊郭、宗教団体・・・、狭い土地になんでも揃っていました。

しかし、住宅はギョウギョウ詰め状態、過酷な労働に見合わない賃金。こんな状態で、何も不満が起こらないはずがありません。

一部の荒くれ者が暴動を起こそうと企てますが、そのほとんどは未遂に終わり、首謀者とその仲間たちは夜の明けぬうちにクマ牧場に放り込まれたと言われています。

・・・炭鉱火災に次ぐ黒歴史です。

そんなこともありました、当時のトホホベツが北海道の中で一番輝いていたのは間違いないありません。

みんな「自分たちが日本を支えている。」と自負していました。

みんな「輝く未来が待っている」と本気で信じていました。

#### 4、どん底

そんな中学2年生のような青春は長くは続きませんでした。日本の成長を支えた石炭は、あっけなく「無用の長物」に変わっていくのです。

エネルギー革命以後、異国の石油に主役の座を奪われた国産の石炭。御多分に洩れずトホホベツ炭鉱も減産につぐ減産。ひとつ、またひとつ炭鉱が閉山。さらに相次ぐ炭鉱火災、爆発事故が重苦しい空気に拍車をかけ、町を去る者が後を絶たなくなりました。

27カ所もあつたクマ牧場も気づけば3カ所しかなくなっていました。クマたちはどこに行ってしまったのでしょうか？それは「トホホ七不思議」の一つとして今も謎のままです。

石炭とクマしか取り柄のなかつた町。1952年に17万人いたトホホベツは、20年後の1972年にはなんと6万人にまで激減してしまいました。

閉ざされた炭鉱、息のない炭鉱住宅。

途方もない絶望感がトホホベツ全体を包み込んでいきました。

## 5、伝説の男、現る。

1984年、この寂れ切った町に一人の男が帰ってきました。

彼の名は八反田 留三(はつたんだ とめぞう)。1953年生まれ。

父親はトホホベツの炭鉱マンでしたが、留三が中学生の頃にはすでに仕事を失い、炭鉱住宅という箱の中で一人カツゲンを飲んだくれています。

こんな父親に嫌気がさした留三は中学卒業後札幌へ飛び出し、住み込みで新聞配達の仕事をしながら定時制の高校に通いました。

高校を無事卒業した留三は、食って行くために様々な仕事を経験しました。

配管工、バーテンダー、土木作業員、番組モニター、飛び込み営業、ゴーストライター、健康器具販売、カントリーウエスタンのバンジョープレーヤー、ツアーコンダクター、竿竹売り、通販番組のディレクター、オーディオ評論家、ウニの殻剥き、ホルノ監督、ブリーダー、スキーインストラクター

・・・最も働いていた時は7つの仕事を掛け持ちしていたと言います。

睡眠時間は1時間半ぐらい。

でも留三はそんな過酷な生活でも、体を壊すことなく真面目に働きました。

何故なら彼は、根っからの仕事大好き人間だったのです。

「仕事以上のヒマつぶしは無い。」



「女抱いてるヒマあつたらポルノ1本撮れる。」

彼は名言を幾つも残しています。

危ない橋を渡っていた時期もありました。悪い女に遭遇することもしばしばありました。そんな時はふるさとトホホベツ開拓者たちの「ピンチはチャンス」という言葉を思い出し、涙をこらえ乗り越えてきました。

様々な業種に関わったことで、途轍もなく幅広い人脈が形成され、留三は札幌では知らない人がいないほど超有名人になっていました。

・・・そんな男がトホホベツに帰ってきたのです。ある一つの決意を携えて・・・。

民営都市トホホベツ①

2014年3月1日 発行

著者 一戸 幹男

発行者 一戸 幹男

出版 らんこし作家デビュー・プロジェクト

© Mikio Ichinohe 2014

